

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 志野好伸

本論文は、中唐の文人である韓愈(768—824)をとりあげ、安史の乱以降、伝統的な儒家の道が廃れた時代に、すなわち「破壊の後に」生まれた彼は、六朝時代以来の修飾をこととする四六駢儷体を退け、形式にとらわれることなく自由に思想表現すること、すなわち後世にいう古文運動を通して、全く新しい儒家的秩序を構築することをめざしたが、その韓愈の文章の中で一見奇異にみえる「鬼神」すなわち筆者のいう「幽霊」がしばしば登場し、韓愈の思想構造において重要な要素となっていることに注目し、「幽霊」「言語」「共同体」という論者の設定する鍵言葉から韓愈の思想を新たに解明せんとしたものである。

具体的に本論文では、韓愈は歴史家の責任が問われる場面において(第一章「柳宗元との応酬」)、道釈二家に対抗して儒家の道統を表明する場面において(第二章「破壊の後の道」)、さらには文章を書くという行為そのものについて論じる場面において(第三章「破壊の後の言語」)、すなわち韓愈の主張が色濃く現れる場面において、鬼神に言及する点に着目する。これらの場面における鬼神の出現は思考と論理を複雑にするものであり、韓愈の主張にとっては必ずしも有利にはたらいっているわけではなく、時には論旨を混乱させ、論拠を台無しにしかねないものとして登場する。それにもかかわらず韓愈は、おそらくはそれを重々承知の上で、なぜ鬼神に言及せざるをえなかったのか、という問いを論者は根底に置く。そして論者は本論文の上記各章で取り上げた各方面からその疑問を解明していき、最終的には「韓愈は幽霊に取り憑かれてそうしたのだ」「すなわち幽霊には韓愈にそうさせる魅力があったのだ」と結論付ける。

従来の研究においても、韓愈が鬼神を直接話題に取り上げた文章に関しては論じられ、伝奇小説の流れに深く関わるものとしてかなり注目されてきた。しかしその際も、鬼神の問題はある特定の文学上のジャンルの中においてのみ処理され、韓愈の理論的で思想的な言説にまで影響を及ぼしていること、しかも決定的な仕方で影響を及ぼしていることについては、全く論及されることがなかった。そもそも、韓愈の文章と思想には非常に歯切れの良い「陽」の部分と、それにも関わらず他方歯切れの悪い非合理的な「陰」の部分がある。本論文は、韓愈の文章を鬼神(論者のいう「幽霊」)の問題を軸に読み直すことで、韓愈の思想を陰の面という全く新たな視座から解明した点、また思想史と文学史という既存の領域を超えて韓愈の文章と思想とを総合的に解明した点とから、韓愈研究において新しい局面を拓いたものとして高く評価される。

本論文において、時として論者は論者自身の独特の用語を用いており、その用語の定義が曖昧な場合があり、またそれらの用語が論者の意図に反して論証の明晰さを曖昧にする場合があるなどの疑問点が審査員から指摘されたが、それらの点は本論文の価値を些かも損なうものではない。

本論文を以上のように評価した審査委員会は、本論文に対し、審査の結果、博士(文学)の学位を授与できると認める。